

1988年から続いたミャンマーの軍政時代、欧米諸国が距離を置くなかでも中国はミャンマーとの政治的・経済的関係を維持していました。また、最近のロヒンギャ問題でも欧米諸国のような非難はせず不干渉の立場を取っています。これらは大いに戦略的なものかもしれませんが、中国にそうさせるのは、ミャンマーが東南アジアの諸国のなかでいちばん長い国境で接する隣国であるという地政学的な理由もありそうです。

1 「一帯一路」とミャンマー

習近平主席の「一帯一路」構想は、北は陸路をロシアやヨーロッパまで結び、南は海路を東南アジア、インド、中東、アフリカまで伸ばす壮大な経済構想圏ですが、その中でのミャンマーを経由するルートは、陸路でインドを目指す「枝葉」のようにしか見えません。

しかし実際は、陸路においても海路においても重要な位置にあるのがミャンマーです。ミャンマー国内の陸路や港湾の整備によりマラッカ海峡を経なくても直接インド洋のベンガル湾に出られるからです。そこで構想以前の軍政時代から、ベンガル湾に面する港町チャオピーからマンダレーを経由して中国雲南省まで達する、800kmにも及ぶ天然ガスと原油のパイプラインの建設が進められてきており、既に設備は完成して輸送が開始されています。

ミャンマー西側のベンガル湾には大量の天然ガスの埋蔵が確認されており、現在稼働しているパイプラインは主としてこのベンガル湾で産出される天然ガスの輸送に使われています。今後中国はチャオピー港の拡大整備により埠頭数を増やし、中東からの原油の輸送ルートを確認することを目指しています。つまり昨今中国国内で飛躍的に増加しているエネルギー需要に対応していくのにミャンマーは重要な隣国であるということになります。

また、本年9月には物資輸送の強化を図るため、西海岸とヤンゴンからマンダレーを経由して中国雲南省につながる高速道路の建設について両国で合意し、覚書を締結しています。



■中国の「一帯一路」構想



■天然ガス・原油のパイプライン

※北部山岳地帯の都市「ミットン」近郊でも水力発電のためのダム開発プロジェクトが中国の資金で着手され、中国雲南省への電力供給を予定していましたが、2011年の民主化以降、自然破壊をもたらすとの地元住民の反対運動により現在は休止状態になっています。

2 ミャンマー・中国間の歴史

元々ビルマ族の起源は中国青海省付近に住んでいたチベット系の氏族と考えられており、また国内のチン族、カチン族は中国最古の大国「秦」を源としているという説もあります。

両国間の関係は、中国の雲南省とミャンマーのカチン州・シャン州に跨る山岳地域が地形的に緩衝地帯となっているため、ミャンマー・中国間の歴史の中では、頻りに交戦や併合が繰り返されていたということではないようです。

最初の統一王朝であるパガン王朝（1044～1314年）は、13世紀末に元（モンゴル）の侵攻を受け、1287年の「パガンの戦い」で敗北し元の属国になっています。1303年には国内の新しい勢力が元を排除したものの、弱体化したパガン王朝はまもなく滅亡し、16世紀まで約300年にわたる分裂時代に入りました。



■バガン（パガン王朝遺跡）

1754年にはコンバウン王朝（最後の王朝・～1885年）がビルマを再統一しましたが、シャン族を中心とした旧勢力が清の乾隆帝に援助を求めたことをきっかけに、1765年「清緬戦争」（～1769年）に突入しました。4回にわたる清の侵攻はすべて失敗し、清側からの和平申し入れにより戦争は終結しましたが、清側の記録では、和平によりビルマが朝貢国になったとしています。

※乾隆帝はこの戦いで義理の息子である明瑞を失っています。

その後、3回にわたる「英緬戦争」を経てビルマは1885年にイギリスの属国となり、英領インドの1州になってしまいます。以降1948年に「ビルマ連邦」が成立するまで間、さまざまな独立運動が展開されていきますが、この間に活躍したのが「建国の父」と呼ばれるアウンサン（スーチー女史の父）です。また、1939年にはビルマ共産党（CPB）が結成されていま



■ミャンマー地方行政区分図

す。

1949年、国共内戦に敗れた中国国民党軍の残余部隊がシャン州に侵入し、反共ゲリラを展開します。一時はアメリカが援助を画策したものの、当時の政権は、中華人民共和国と連携し、中国人民軍と国軍部隊を送り込み、1950年代半ばまでには国民党軍勢力をほぼ一掃しました。しかし、シャン州は独立意識の高いシャン族などの民族の武装化や、当時都市部から排除されていたビルマ共産党による当地での麻薬産業の支配などにより、半独立状態が続くこととなります。そして、こうした経緯が現在の少数民族問題にもつながっていきます。

3 中国との交易

両国は、いくつかの同じ民族が国を跨って居住していることもあり、以前から山岳地帯の比較的狭い範囲では盛んに交易が行われていました。近代に入ってから「援蔣ルート」が整備されたことから、交易の範囲もさらに広がることになりました。「援蔣ルート」とは、1939年日中戦争の開戦後に連合軍側が建設し、インドからビルマを経由し中国国境の山岳地帯を越えて蒋介石の国民党軍の本拠地である重慶まで、軍事物資などを送り届けた道路のことです。主要部は、ミャンマー第二の都市マンダレーから、国境の町「ムセ」、隣接する中国側の町「瑞麗」を越え雲南省の省都昆明に抜けていきます。

「ムセ」と「瑞麗」では戦後も盛んに国境貿易が行われて、民主政権移行後は両国の貿易量も飛躍的に伸びており、現在、中国との陸路貿易物資の70%がここを通過していると言われています。因みに国どうしでは、近年はタイを抜いて中国が1番の貿易相手国になっており、中国からは機械、電化製品、衣料などが、ミャンマーからは農水産物、天然ガスなどが輸出されています。

さらに、ミャンマー中央部に位置するマンダレーもまた交通の要所にあたり、中国から運びこまれる中国製品の一大集積地となっており、また中国人が経営する縫製などの工場の立地も進んできました。その結果最近では中国からの移民が飛躍的に増加しており、120万人の市の人口の半分を占めているとのこと。

※マンダレーは、19世紀後半英国に植民地化されるまで、コンバウン朝最後の都でした。当時のミンドン王によって造営された計画都市で、一辺2kmの正方形の王城を中心に碁盤の目状に整備された町は、現在で



■ムセ（検問所の向うは中国瑞麗市内）



■1911年頃のマンダレー

も西安や京都に匹敵する街並みを残しているそうです。

4 中国国境地帯の少数民族

① ミャンマー・中国の少数民族

中国では漢族が92%を占め、それ以外の民族はいわゆる「少数民族」と呼ばれて55の民族が主に国内の周辺部で生活しています。少数民族問題でよく取り上げられるのは、西部のウイグル族やチベット族などですが、これらの少数民族は宗教や文化が漢族と違うところに、時の政権から政治、経済そして文化にいたるまで統一的な枠組みを押し付けられてきたことから、時として摩擦を生じ、武力衝突を引き起こしていると考えられています。

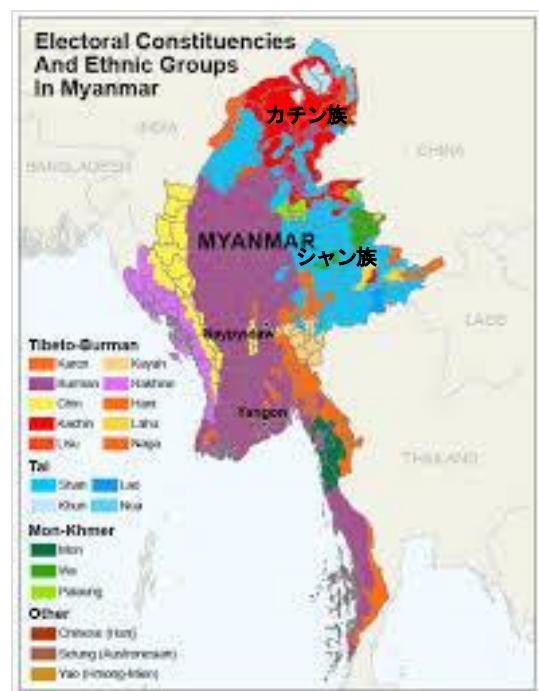
一方ミャンマーは、大分類8民族と小分類135民族で構成されており、8民族のうち最大のビルマ族が70%を占めて主に中央部の7つの管区に居住しています。その他の民族（少数民族）である7つの民族が周辺部の7つの州を中心にそれぞれ居住しており、州のそれぞれに民族の名前が付いています。

中国との国境地帯には過激な少数民族も居住しているとされていて、民主化以降のミャンマーでも難題として継続していますが、ミャンマーの場合は、宗教や文化の違いという事情はもちろんですが、1948年の建国以降の中国との関係も話を複雑にしている要因になっています。

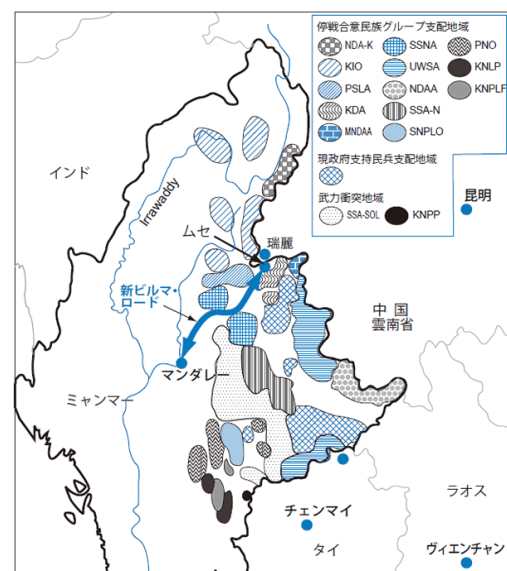
※英国植民地時代に、カチン族、チン族など一部の民族のなかではキリスト教が広まってきました。

建国以降これらの地域には、中国国民党の残党や都市部からのビルマ共産党が入り込み、加えてこの地域はアヘンの原料であるケシの栽培が盛んで、その主導権を巡る争いも絶えませんでした。またこの一帯は豊かな鉱物資源や森林資源を有しており、元々民族の独立意識が高いことから一部に武装化組織ができ、中央政権との対立が60年以上も続いている場合もあります。

そうしたことから中国国境では政府軍といくつ



■ ミャンマーの民族分布図



■ 少数民族勢力の支配地域

かの武装化組織との衝突も頻繁に起きており、中国での少数民族問題以上に深刻であると言えます。

② 国境地帯の少数民族

中国雲南省では55の少数民族のうち22の民族が居住しているとされており（うち雲南省のみに居住するのは15）、ミャンマー側でも同様に多くの民族が現存しています。これは両国の山岳地帯という辺境の地で民族ごとの共同生活がなされてきており、歴史的に民族同化が比較的進んでこなかったことが要因の一つであると考えられています。

そして中国側の調査によれば、中国とミャンマーの国境地帯には漢族〔コーカン族〕、タイ族〔シャン族〕、ミャオ族〔モン族〕、ヤオ族、ハニー族〔アカ族〕、チンポウ族〔カチン族〕、ラフ族、ワー族〔ワ族〕、リスー族など、少なくとも16の民族が国を跨って居住しています。

※〔 〕内はミャンマー国内での呼称です。

特に国境周辺の村々では、別々の国民という意識が比較的薄いなかで、国を跨って同じ民族同士の共同生活が行われている場合も多く、中には両国の児童が同じ小学校に通っているというケースもあるそうです。



■カチン族（中国ではチンポウ族）



■瑞麗市銀井小学校（4割の児童がミャンマー人）



■中国側のハニー族（ミャンマーではアカ族）

最近になって、マレーシアでの中国企業による高速鉄道建設の中止など、アジアでの「一帯一路」関連事業の中止・縮小の動きが出てきています。これは中国への負債過多を警戒してのことですが、ミャンマーでも例外ではなく、最近になってチャオピー港の拡張計画縮小を決定しました。中国は表立った反発はしていません。これも中国にとってミャンマーが「南アジアでいちばん近い国」だからでしょう。

※出典元省略